

て行くものは院展である。先に述べた通り、美術院派が最初からの理想を堅く持續し、其の中の新進氣鋭の畫家が揃つて眞面目に研鑽努力して居るから第一回即ち大正三年の院展に於て、院展の内容が文展の三分の一にも満たないのに、其質に於ては一步も文展に譲らなかつた。否寧ろ安田靫彦の御産の禱前田青邨の竹取の如きは、文展に於ては到底見る事の出来ない傑作であつたと云ふ世間一般の評である更に第二回の院展と全年の文展即ち第九回の文展とを比較すると、院展は更に其の畫が多趣にして活氣に満ち、内容の精整せる點に於て文展はたしかに院展に一籌を輸した様である。下村觀山の大作羽法師は其の蘊蓄を傾けて渾厚溫雅な趣を表し、技巧と内容との間に寸毫の隙もない傑作を出した。小林古徑は阿彌陀堂を描いて冥想的神秘の境を宗教的古建築に托して善く示した。院展はあくまで自由を標榜し拘束を無視して立たんとして居るので、文展と多少異つた方面に進んで行くが、兎も角この兩者は相對立して將來の日本の繪畫の新生面を開くべき重任を有して居る事は同一である。

以上は大體明治、大正の繪畫即ち最近の日本畫が如何なる道條を通つて進んで來たものであるかと云ふ事を文展院展を中心として述べたのであるが、要するに現今に於ては文展院展を通じて、寫實を根底とする繪畫が著しく優勢を示して來た。そして此等實景より得た所を繪畫化する爲に、或は倭畫に還へり佛畫に行き浮世繪に赴き文人畫に向ひ、或は裝飾畫に走り或は新描法に至らんとしてそれ〴〵苦心して居る。而して此等何れの方面をも着色して居るのは裝飾化の傾向である。即ちひきくるめて云へば寫實と裝飾とが現代日本畫の二大特徴であるらしい。

## 感想

書齋より

みち子

「人々との間に起る小さな衝突や氣まづさやで自分の心の静かさを破られ度くない」自分はいつもかう思つてゐる。けれども實行はできない。「あゝまだ自分はこんな所に低徊してゐたのかさ動搖しなから——又はしてかう思ふ。願くばその前にこの考が浮んで欲しい。其處に大きな矛盾があり悲劇がおこる。もはや自分はいゝ加減な口實のもとにこれを許しておく術を知らない。ほんま小さい石を投げ込まれてもぐらくさする人がある、なんさいふ小さい人間だらう私達はもつと強い筈だ大きい筈だ。清も濁も併せ呑むひろい心ですべてを受け入れ更に自分のものとするかしないかに就ては明らかなら理知の裁きに訴へなければならぬ。いつでもおろ〴〵し〴〵して統一も何もないまるで英語の單語を引くやうなほつ〴〵の生活を醜しと思ひながらも私達のこの生活は何であらう。何處に統一がある。自分の眞の生活は何處にあるのか、私は長い間自分のほんまの生活を探して歩いた。しかし眞の生活は別の色をなす特別な形をして存在してゐるのではなかつた。私達の「ふだんの生活」それをおいて眞の生活はない。それに處する人によつて地を離れた浮いた生活さなり底の深い大地を踏みしめた生活さなる、雑巾がけな一生懸命するのも眞の生活である。何處までも眞面目に正直に考へた

□人 専一  
どんな人でもみんな自分をよきと思つて居る。いくら、謙遜した心持で人と話して居る時にも、いくら、自分をさげすんで物を見て居る時でも、心の底の何處かに、やつぱり、自分をよきと信ずる心がひそんで居る。「自分をよきと思ふ心。」それはよいか悪いのが、私にはわからない、けれども、その心があるから、人間らしいのかも知れない。

生活をしなければならぬ。しかし一般的の愛ならばその價値も少いと思ふ。(勿論受ける人にまつて)眞の愛は幾分嫉妬を伴ひ獨占の傾がある。相手の全部を自分が所有し自分の全部を所有されても悔のない人——しかしそれはむづかしい事である。私はもはや安價な妥協の生活に堪えられなくなつた。それだといつて何うする事もできない。私は誰もいらぬ。誰にも求めない。一人で生きてゆかふ。生半可な理解と愛を得てそれに頼つて安心を得るやうな醜い事をよまう。そして泣きながら一人で自分の道を淋しく強く歩いてゆかふ、深山の間の湖のやうに靜かに、孤獨できれいに清んでゆき度いと思ふ。

何も知らない私は女の缺點のすべてを男にもつていつて男にはそんないやな事はない。女さいふものはいやなものださ密かに自分を咀つてゐた。しかしそれは狭く浅い私の想像に過ぎなかつたらしい。男も女も等しく神の造つた人間の半分である。私はかう疑ひかけた。人間には眞から悪い人もない。全くの善人は勿論ない。人間は善人であり、悪人である。善人と思つてゐた人がふいさ悪人にかはることがある。善人さば悪の境遇におかれぬ幸福な人さいふ意味である。人間はすべて善人だと思つてゐた方が、多くの場合いゝ。しかし時には悪人さなるかもしれないさいふ考をもつて、あまりゆるし過ぎないやうにした方がよきはなから思つてゐる。半間の窓を明け放つて、其處に擴がる紺碧の空を床の上でじつと見てゐるさ秋の光は、天地に遍満してははてしなく深い。それを背